Komazawa University

公開講演

『法華経』の精神

塩入良道

只今、御紹介頂きました大正大学の塩入でございます。過去三年間、仏教学部長などという役職についておりまして、まとまった研究もちょっとできないでおったような関係で、果たして期待して頂くようなお話ができるかどうか疑問でございますが、平生『法華経』を読み、中国の仏教あるいは日本の仏教、天台教義が中心でありますが、仏教全体の流れというか、展開というかをみつめたうちに感じた事なども含めまして、あるいは学問的には少々一方的な面もあるかと思いますが、『法華経』は何を言おうとしておるのか、『法華経』の目ざしているものは何かといった点についてお話してみようと思います。

『法華経』と申しますと、只今の光地仏教学部長先生のお話のように、『観音経』だとか、『如来寿量品偈』など曹洞宗の方々でも随分読んでおられますし、日本仏教の多くの宗派で親しまれているお経が含まれている経典であることは、今更申し上げるまでもないわけでございます。ところが一般の方々は法華経というと日蓮宗だけのお経、さらにある特定の信仰の独占物の如くみられる面がございまして、何か狂信的な経典であるが如く誤解されている点もございます。これはまあ、本当か嘘かわかりませんけれど、人に聞いた話ですが、浄土真宗の盛んな安芸門徒とか三河門徒、あるいは北陸門徒などでは、「南無妙法蓮華経」を唱える日蓮宗の檀徒と、それから本願寺さんの「南無阿弥陀仏」を専称する門徒は、結婚すら現実問題として、できなかったというような話も残っているくらいで、法華経と浄土信仰、あるいは「南無妙法蓮華経」と「南無阿弥陀仏」というのは、もう両極端のように考えられているのが世間一般のようでございます。

日本文化と法華経

さて、それはそれとして、日本仏教、とくに中世・近世ま

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

での仏教において、法華経が日本仏教に及ぼした影響は、はかり知れないものがありまして、これは皆様もある程度おき及んでおると思いますし、道元禅師の『正法眼蔵』には法華経の引用は多く、とくに「法華転法華」という一條さえ設けておることはよく御存知のことと存じます。道元禅師の法華経観については、あとで述べますが、とにかく日本仏教と法華経は切り離すことはできません。

法華経という経典は非常に日本仏教においてよく読まれており、日本文化に与えた影響は、最も顕著なものがあったということが在来言われておりますし、また種々研究されておるわけでございます。皆さん御存知かどうか、今の西本願寺の法主の養育係になられた島地大等という、浄土真宗の方ですが、天台学の大家がおられました。『天台教学史』はじめ『日本仏教史』とか、『仏教綱要』など不朽の書が残っておりますが、法華経についても、原漢文と和訳及び科文を傍注とした書物がありまして、その附録に釈教歌、特に法華経について歌われた和歌を何頁かにわたって挙げております。その数がですね、要するにその内容からみて明らかに法華だとわかるものは別として、法華を詠んだと題のあるものだけを載せておりますが、例えば二十八品のそれぞれを詠んだとか、あるいは経文のこれこれの用語を詠んだとか、題が明記してあるものだけで何と千三百六十種にのぼっています。ただ残念なことですが、どれとどれと、どういう歌集から、何百のうちから取ったのか、という事がちょっと現在のところ調べがつきませんので、これだけではまあ、何とも言えません。んけれど、とにかく圧倒的に多いことには変りありません。

また立正大学の高木先生が「法華経和歌と法門歌」という論文の中にですね、これはある程度和歌集をほとんど網羅していますが、これもその和歌がいくつあったか、という事は書いてございませんのでちょっと不充分ですが、要するに「法華経歌」と称して千四百五十七首を時代別に分類しまして、平安期二十二％、鎌倉期三十五％、室町期二十三％、江戸期十七％弱、とそういう統計を出しておるんですね。

明治末年に編纂された仏教辞典として定評のある『織田仏教辞典』を見ますと、「歌題」という分類がなされており、非常に長い熟語が載っております。織田得能さんは、明治の末において『国文学における仏教の影響』という釈教歌を中心とした小冊子を出した事がありますが、非常に国文学において法華経を扱っているものが多い。そして織田得能さんの辞典によると、大体、平安から鎌倉ぐらい、初期ぐらいまでのものが非常に多く使っておるようです。

ところで私共もそういうものを見たりしておりましたので、平安朝が一番法華経に対する和歌が多いかと、そう見ておったわけですが、高木先生の統計を見てびっくりしたわけ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

です。平安期二十二％に対して、鎌倉三十五％。非常に多いわけです。それで、平安時代には現在のように仏教というものが、そう各宗、各派というように、もちろん檀信徒もふくめまして、固定した教団形態をもっていなかったわけです。要するに仏教であればよかったという面があったわけであります。ところが鎌倉仏教がおこって、それぞれの信仰に基づく教団が生れたと一般にいわれるのですが、法華経を詠んだ和歌が平安期よりも鎌倉時代の方が圧倒的に多いということは興味深いことであります。

これも、こちらの大学に関係がありましたかどうか、間中富士子さんという鶴見女子大学の先生をしている方の話ですが、『源氏物語』に、「雨夜の品定め」、女性の品定めを行うところに、そのやり方に、後で申し上げますが法華経の法説周・譬説周・因縁周の三周説法、今流に言うならば一般論あるいは原則論、つぎに喩譬、たとえによる論評、それから経験論、体験論、そういったものでしたという事を言っております。

それから、これは有名な話ですが、例の『枕草子』にある話です。清少納言がですね、ある時法華経の講経、今で言えば法要をともなった講演会とでもいいましょうか、その講座の席へ行ったところが、女流作家で昔でも忙しかったと見えまして途中でどうしても帰らなきゃならん。そして帰ろうといたしますと、ある公家さんがですね、「もうお帰りですか、講義はまだ終わっていませんよ」と皮肉を言ったところが、「あなたこそ五千起去におなりあそばすな」と言ったと。これは後で出て来ますが、法華経が説かれます時に、いかなる大乗経典でも、非常に奇端が起こります。六種に地が震動するとか、あるいは天から曼陀羅華が雨降るとか、そういう後で釈尊が三回、舎利弗に御説法して下さいと問われて「止みなん」、「だめだ、だめだ」、今説いてもお前達にはとってもビックリしちゃってわからん。かえってこういう事を説くと、かえって仏教でないと思ってしまうだろう。そして四回目に舎利弗が懇願して、やっと説き始める。そうして説き始めようとすると、五千人の増上慢の声聞、声聞については皆さん御存知でしょうけれど、これが法華経の会座から立ち去ってしまった、とこういう故事があるわけですよね。

そういった平安貴族、文化人の日常の会話にそのような法華経の物語がぱっと出るという事は、いかに法華経というものが、当時の本当の信仰かどうかは一応措いてですね、文化・教養の中に深くはびこっておったかがわかると思います。こんな例は多数ありまして、先程申した織田得能先生の『織田仏教辞典』を見ますと、歌題と分類わけした長い句がたくさんありまして、勿論法華経だけではなく、禅の公案の句や浄土経典の句などもありますが、たとえば「於未来世咸得成

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

仏」（授記品）、「於無量国中乃至名字不可得」（安楽行品）など、私共見ても、さてなこの句は何品にあったかな、というような句に、それを歌題とした和歌を配しています。

それほどに当時の文化人は、法華経というものの信仰が一つの教養にまで見られておったわけですね。これはまあ、比叡山の仏教が法華経を中心として、多くの大乗経典を依り処として法華経を中心とした円、禅、戒、密という仏教でありましたので、そういった比叡山の仏教が当時非常に、良い意味でも悪い意味でも、大変な権力がございましたから、当然文化人に浸透した事は間違いないわけでございますが、さきほどの法華経の和歌が鎌倉期により多いというように、日本文化と法華経は切り離せないものでありました。

法華経と浄土信仰

これについては、まだまだ用例がたくさんありますけれど、一言だけ申しますと、先年私は、岩波思想体系の往生伝と法華経験記というものが一冊になった本の刊行にあたって、井上光貞先生の仏教の方の註のお手伝いをしておりまして、大変感激したわけですけれど、当時の『極楽往生伝』というのは大体、西方浄土、希に兜率往生の話も出てきますけれど、極楽浄土に往生した、という伝記がほとんどであります。

そして、そこに『大日本法華経験記』という法華経の信仰をした方々の伝記が一つ、往生伝が数種あるわけです。この中にですね、これは全部で百二十九例扱っておりますけれど、その人達は、全部法華経の信者、あるいは法華経を読んだ人、あるいは法華経そのものでなくして、法華懺法の行をした人とかいろいろありますけれど、その中で四十六人が西方極楽浄土に往生した、という記述があるんです。要するに法華経を読誦したり、法華経の信仰をもって、西方浄土へ往生する事が、少くとも平安末期、鎌倉初期までにおいては一般の人々はちっとも不思議ではなかったようです。

このことは現在の日本の仏教の法華経と浄土経典、「南無妙法蓮華経」と「南無阿弥陀仏」という対比から考えてですね、ある人に言わせれば、宗教的に純粋でないという見解も多いのでありますが。これについては有名な言葉で「朝題目に夕念仏」という言葉がありますね。これは比叡山で朝は『法華懺法』というものを中心に勤行をしている。夕方は『例時作法』といって、阿弥陀経を読むのを中心とする勤行するというところから出たわけですが、その「朝題目に夕念仏」とは、また逆の意味もありまして、朝題目して夕方に念仏するというのは、無定見すなわちちっとも首尾一貫していないという悪い意味でも使うわけです。そういった意味もあるかもしれませんけれど、私は別の意味において日本人の宗

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

教的情操と申しますか、日本人の宗教的意識にはそういった夾雑性と申しますか、一元的思考でいかないものも多くあったんじゃないかと思います。

現在もこれはまあ、皆さんよく御体験なさると思いますけれど、クリスチャンの方でもですね、特にプロテスタントの方が多いのですが、お寺に参拝しますし、知人の葬儀には仏教的御焼香もいたします。そして私事ですが、自坊で正月お護摩をたきます。その護摩札をクリスチャンの方がお受けしております。そういう方が大変多いわけですが、そういった日本人の宗教意識といいますか、宗教的情操があって、いわば多元的思考が無意識のうちにあるわけです。これは良いとか悪いとか、あるいはどっちが優れて、どっちが劣れるとか、そういう事は別問題としてですね、日本人の昔から現在に至るまでの宗教なのであります。

ちょっと余談になりましたけれど、それからいわゆる一番古い往生伝、それは慶滋保胤の『日本往生極楽記』では四十二人出しております往生した方のうち、十人が法華経を読んだり、法華信仰をもった方です。これ約四分の一ですね、それからこれに続きまして、三善為康の『拾遺往生伝』というのは九十四人のうち三十六人と、それからそれを追加した『後拾遺往生伝』では、百四十二人中二十七人と、これはま、ちょっと減りますけれど。まあ、このようにですね、当時の日本の仏教の信仰者、あるいは教養的に仏教を受け取っておる方々においても、法華経の信仰や修行、さらに儀礼にふくまれた法華経精神と、西方浄土、あるいは兜率往生というものがちっとも矛盾なく融合しておったという事が言えるわけです。このように日本の文化において『法華経』というものが非常にポピュラー化しており、文化に与えた影響は大変なものであったわけであります。

道元禅師の法華経

皆さんは道元禅師の教えを学び、それを体得されようと勉学しておられる方が多いわけですから、禅の無執着の立場から、現代流の言葉でいうと一元的思考の持ち主ではないという事は重々知っておりますし、一般の方々はど『法華経』についての常識が無いという事はありませんと思いますが、やはり所依の経典や宗旨の精神が、多少異っており、法華経に親しむ機会なり、知識については日蓮宗や天台宗の学生より少いかと、そう思いまして実は「法華経の精神」というような題をつけたわけでございます。しかしながら、本日申し上げようとする「法華経の精神」ということは、どちらかというと、一般になされているような法華経の解釈や経典を通じての話でなく、法華経の目ざすものは何か、といったような、あるいは少しこれは口はばったい表現ですが、「日本仏

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

教のルーツ」といった面から申し上げたいと思うわけでございます。先ほども光地先生のお話にありましたように、道元禅師は、鎌倉仏教の中で日蓮さんを除いては、仏教において一番『法華経』を使われた、という事はもう学会の定説であるのは、皆さん良く御存知の事だと思います。私も今度そういう事があるという事は知っていたんですが、道元禅師の法華経観というようなものに接して、これは慚愧に堪えないような気持なんです。始めて『正法眼蔵』の「法華転法華」という項を拝読させて頂きまして、大変びっくりしたわけです。私が「法華経の精神」と題しまして、題をこちらへお届けした、その時に喋ろうと思っていたぎりぎりのところと非常に一致しておるという事に気がつきまして、大変びっくりしたような次第でございます。そういう意味で、今後皆さん方と共に道元禅師の法華経の身に体し方といったものを共に研究したいと思っておりますが、実に「法華経のルーツ」といったものを、実に的確に把握しておられるんですね。もちろん私なぞよりも修行も学問も優れていた、それは当然でございますが、実に私は今回の講演を契機といたしまして、実にまあ感激と申しますか、仏法の有難さと申しますか、仏教には各宗派に分かれた教団が現在の日本仏教ですが、そのなかで仏教という総合面というか一致点というか、それが当然とは申しながら、天台の法華と道元禅師の法華が一致したということに、身にしみて感ぜられるような次第でございます。

この「法華転法華」につきましては、短いものですからもう皆さん御存知の事かと思いますけれど、駒沢大学に関係のない方も多少お見えになっておると思いますので、その要点を御紹介いたしますと、大唐国の曹溪山宝林寺の大鑑禅師、六祖慧能禅師だそうでございますが、その会下に法達というお坊さんがいました。そして自分から称するのには、自分は法華経を読誦する事、既に三千部だと、三千回も読誦したんだと。そうしますと六祖が言うのには、たとえ万部読誦したといったって、経を得ていない奴にはわからないんだと。法達というそのお弟子は、自分は大変愚鈍である、そして従来ただ文字に任せて読んでるだけだが、どうにかして、何とかして宗旨を、この本質をですね、明らかにしたいと申しました。そうしますと六祖慧能禅師は、「汝試みに一遍を誦すべし。」お前は試しに、とにかく一遍だけ私の前で誦してみなさい、わしは汝のために解説してあげよう、と。そうして、その法達という方が読誦していて、方便品に到ると、止めなさいと六祖がいわれた。

これは、皆さんのお手許へ差し上げた表の第二品、第二章ですね。これは後に申し上げますが、上根の修行者には理解される法華経の真髄なのです。そして「コノ経ハモトヨリ因縁出世ヲ宗旨トセリ、タトヒ多クノ比諭ヲトクモ、コレヨリ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ココルコトナシ」とこういう事を言っとるわけです。これはどういうことかと申しますと、これから申し上げること、まあ、結論を先に申し上げてしまいますが、法華経の、成立的にも原始分と申します、原初形態、その、もっとも出発点と申しますか、本論と申しますか、仏教学的に出発点ともなり、本論ともなる思想を述べておるのが、この方便品なんです。ですから、方便品だけが重要ではもちろんございませんが、宗派や学派の解釈をはなれてみても法華経の本質的な思想です。

六祖はつづけて「何者因縁トイフニ、唯一大事ナリ、唯一大事ハ、即仏知見ナリ。開示悟入ナリ。オノツカラコレ仏之知見ナリ。已ニ知見ヲ具ス。彼レ既ニ是レ仏ナリ。汝イママサニ信ズベシ。仏知見者、只汝カ自心ナリ。」重ねて示す偈として、「心迷ヘバ法華ニ転ゼラレ、心悟ラバ法華ヲ転ズ」と、即ちいくら何万遍読んでも心が迷っていると法華経に振り廻されちゃうんだと。この「迷フ」という意味は重要な内容をもっていると思われ、釈尊の真の精神を理解していないと一応申しましょうが、天台の摩訶止観に「無法愛」という十乗観法の最後にありますように、この仏法だけがすぐれているのだという仏法への愛着すら否定されておるわけで、法華経に説かれる説を信奉することすら迷う内に入るわけです。さらにこれと対句として「心悟レバ、法華を転ズ」と、法華経を自由自在に行使し理解することを強調するわけです。さらに誦する事久しきも、己れを明かさざるは、義のために讐家となると述べて、仏教の本質を理解しないで法華経の教義を振りまわすとかえって讐になってしまうんだと。という事を申します。そのお話を道元禅師は引きまして、法華経というものが、ただ釈迦如来だけじゃなくて、十方三世、一切諸仏の「転法華」であり、「法華転」だとそういう事をまず申します。

ここで六祖と法達の話を引用したと申しましたが、実は道元禅師の法華経観を述べたあとに引用されるわけで、もちろん六祖の「法華転法華」の精神からこの『正法眼蔵』の第十七章に入れられる内容が出てきたわけで、中国禅家も法華経の真髄をこのように理解したということは、大変興味深いわけであります。いま中国禅を云々することは避けますが、従来「直指人心・不立文字」を禅家の特色のようにいわれ、中国伝統の学問形態のうちに育まれた義学中心の仏教学に対する批判と反省から釈尊の本質にふれようとした禅林では、経論研究は殆んど無視されているように云われますが、「法華転法華」については、他にもその例証は数多くありますが、実によく経典を熟読理解した上の、実に鋭い経典観であろうと思います。あとで申し上げますように、中国仏教家の法華経解釈のめざしたものが、「心迷えば法華に転ぜられ、心悟

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

れば法華を転ず」の一句に凝縮したように思えてなりません。

さて道元禅師の法華経観ですが、『正法眼蔵』の研究家や曹洞の宗風による解釈と多少異る面もあろうかと存じますが、今日私が述べようとする趣旨の一面からだけ、私なりに理解したことを、ちょっと申し上げておきたいと存じます。まず道元さんは、十方仏土中は法華の唯有なりと申して、十方三世一切諸仏や阿耨多羅三藐三菩提の衆は、転法華・法華転だと申すのであります。すなわち法華経は釈迦仏と十方諸仏の「乃能知是事」の甚深無量の法であり、文殊師利仏として、釈迦年尼仏として、普賢仏としての「法華転」であり、弥勒に授記する「法華転」であるとするのであります。さらにこの法華は過去七仏おのおのに究尽されたもので、西天竺・東震旦に至るもので、三十三祖大鑑に至るも唯有一乗法であるとして、青原・南岳の法門にも転ぜられ、嫡仏仏嫡の開示悟入としての「華転」であるとまで申し、高祖曹谿古仏などという表現すら現われるのであります。これは法華経が法の普遍性をもっていることを如実に現わしておるわけでございます。

さらに方便品の「唯仏与仏」「一大事因縁出現於世」「如是相」「仏之知見」「世間相常住」などの用語を駆使して、法華経の精神はあらゆるものに展開していくことを述べているものと考えられます。また先に申した六祖の「心迷ヘバ法華ニ転ゼラレ」を、そのまま肯定して、劫より劫にいたるも法華なり、昼より夜にいたるも法華なりと、現実のありのままのすがたも法華の展開であるとするわけで、後に申しますように法華経の精神は、あらゆる仏教に及び得るという一面を、禅風に解釈したものに外ならないと思います。

また「法華転」と「転法華」についても、単に迷と悟に分判しないで、凡そこの諸仏如来の知見波羅蜜は、広大深遠なる法華転であり、授記は自己の開仏知見であって、他の授くるものでないのが「法華転」だとして、これが心迷はば法華に転ぜられることとするのです。しかも心悟れば法華を転ずるということは、法華がわれらを転ずる力が究尽したとき、かえって自ら転ずる如是力を現成することで、この現成が「転法華」であると、いわゆる道元流の解釈をしておりまして、三草二木の譬や髻珠の喩、さらに地涌の宝塔など、さらに或現仏身而為説法の妙音菩薩品や観音普門品まで法華経の流通分の追加までも転法華と理解しているようです。この点は道元禅師の思想から多少はずれておるようですが、後に申し上げる私の主張と共通しておりますので、一言附け加えておきます。

以上申したことは、あくまでこれからの話の前置きなんですが、しかし『法華経』というものが、本当に道元禅師があれほど素晴らしい理解、解釈を示したのはそういうところに

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

あるんだ、ということですね、ある意味ではそういう下地、受け入れられるものがあったからこそ、法華経というものが日本文化の中に浸透していったんだとも言えますけれども、私はそういう事よりも、やはり法華経そのものにそういった素地が本質的にあったんではないか、そういう事を時間的に申し上げきれますかどうかわかりませんけれど、一言申し上げてみたいと思います。

法華経の成立

そこで、差し上げた資料、法華経の科文の一覧表の下を見ていただきたいと思います。

ここで現行妙法華というのは、現在実際に読まれている『妙法蓮華経』二十八章、それから、『正法華経』というのは、それよりも約百二十年ほど前に訳された竺法護訳の『正法華経』というものなんです。で現在読まれてるのは言うまでもなく鳩摩羅什が四〇六年に訳した『妙法蓮華経』でございます。そして、現在二十八品ですけれど、羅什が翻訳しました時は十二番目の『提婆達多品』というのが、独立しておらなくて、前の『見宝塔品』の中に位置しておったというので、羅什の翻訳したのは二十七品であったわけです。ついでながら、ここに書きませんでしたが、今よく「浄土三部経」だとかあるいは「護国三部経」と「三」をつけていう例が多いですが、『法華経』には『無量義経』一巻、『法華経』が八巻の二十八章、二十八品、それから『普賢観経』正式には『観普賢菩薩行法経』という経典がありまして、これを法華三部経と、天台大師の時はそんな事言ってはおりませんが、しかしそういうように位置づけています。そして現在日蓮宗の方では、開経、結経として「法華三部経」として重要視しています。これが「浄土三部経」とどっちが早く云われ始めましたかわかりませんが、共に有名な言葉になっております。

そこで二十八品と『無量義経』一巻、『普賢観経』一巻で、ちょうど三十になりますね。それから八巻とこれを加えるとちょうど十巻。それで比叡山を開かれた最澄さんは、比叡山である時期修行してから、天台大師の御命日に法華十講というものを始められた。法華経の講義でございますね。それが、法華十講とは十回やるわけですね。大体、四日から五日かけてやったのが多いようです。それから各品ごとに講義をし、あるいは読み、それが現在は多分に儀式化、儀礼化しておりますが、当時も儀礼化しており、講義の前後にですね、いろんな仏教法要がついていたわけです。それが法華三十講と呼ばれる。そういうようにですね、国文学など見ますと常に法華十講、法華三十講というのは出てまいりまして、現在でも大きい寺では行っております。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

余談はさておきまして、法華経という経典は下のいろんな成立史と書いてあるところでも見られますように、割合とこの古い層から新しい層、後からだんだん附加されたという事がですね、割合わかりやすく、といいますか、悪く言えば非常に下手くその、その作り方だ、という事になるかもしれませんけれど、そんなところからも中国仏教においても、法華経というものが一度にできたもんではなくして、後から付け加わったものがあるのではないかという疑問が持たれておったわけであります。

そのまず第一が、現在の妙法華の二十二に嘱累品というあれがあります。これはですね、般若経典の中にも、経典の一番最後ではなくして、中途にはいっているのもあるそうですけれど、この法華経の場合は途中にはいっている。この嘱累品という性格は、お釈迦さんが経を説いた、そのお釈迦さんの滅後その経をどのように皆は護持してったらいいか、守ってったらいいか、それからこのお経によってですね、どのような利益を受けるか、あるいは加護を受けるか、ま、そういうような事を書いてあるのが嘱累品の性格でございます。そんな事から羅什訳に二十二番ですが、経典の一番最後にくるのが大体普通でございます。

今の論文で言うと序論、本論、結論といいますが、結論とはちょっと性格が違った内容で流通分と申しますが、形の上から言えば経典の結論であります。ところが『正法華』を見ますと、これが最後の二十七番目へいっています。この『正法華』の方は羅什と同じように、やはり提婆達多品が見宝塔品の中にふくまれていて、提婆達多品として独立しておらないもんですから、二十七になるわけです。ところが羅什訳の方が翻訳された年代は、新しいんですね、百数十年。しかしながら現在多くの法華経の成立について研究されている全部の学者が、やはり嘱累品が前にあるのがおかしいと感じて『正法華』の原本、梵本が一番後ろへ回したんだと言っております。そんなところから、形から見ますとですね、第二十三品、二十四品、二十五品、二十六品、二十七品、二十八品というものが、いろんないきさつがあって、付け加ったんだというのが大体現在の定説でございます。

実際において、この法華経の内容を見てみますとですね、法華経二十八品を一つの脈絡ある形に付け加えていなければいけないので、多分に前の品、前の思想、前の表現、前の舞台――法華経は非常にドラマチックな文学的な作品でございますから、そういうものを合わせるために――それに合うような表現がつけ加えられておりますけれど、二十三品以後はですね、必ずしも法華経にどうしても必然的になくてはならないという内容じゃないんです。もちろん、その中に法華経がすぐれた経だとか、法華経を読誦するとこれこれの功徳が

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

あるとか、法華経を護持しなさいという事は述べられていますが、法華経自体の思想から言えば、傍系と言いますか、いろんな信仰が附加されてきたといえるのです。

例えば二十三品の『薬王菩薩品』、薬王菩薩本地品というのが正式な名前ですが、要するに薬王菩薩の前世の苦行が語られています。日月浄明得仏と、法華経のために、薬王菩薩が自分の肘を焼いて、焼身供養あるいは指灯供養したというのです。そして自分自身の最も大事なもの、それは自分自身の肉体ですよね、これは法隆寺の玉虫厨子に、飢虎のために身を捧げたジャータカ物語、釈尊の前世の物語なぞありますけれど、そういう薬王菩薩の信仰です。

それから二十四品の『妙音菩薩品』というのは、妙音菩薩が十六種の三昧を得て衆生のために梵王だとか帝釈天・自在天・居士・祭官・バラモン・僧・尼・信士・信女等三十四種の種々に身を現じて法華経を説くことを述べますが、次の観音普門品のですね、三十三身示現とほとんど同じですが、その色身三昧という三昧を得る事ができた、とそんな信仰です。

それから『観世音菩薩普門品』、これは一般に有名な、ですね。これは三十三身説で、三十三に身を変えたという。これは前の『妙音菩薩品』と大体同様です。余談ですが、同じように数えていくと、三十四身なんですよね。ところが現在中国へ行きますとやはり、観音さんは三十四に示現した、身を変えたというあれが、私の経験した寺では皆、三十四身のようですね。ところがどうも天台大師が初めて三十三と言い始めたらしいんで、数からいってどっちがどういうものか、これまだ研究してございませんけれど、似たような信仰でございます。念彼観音力によって、火難・水難・刀杖難等の七難から免れると、いう信仰です。

それからの次の『陀羅尼品』は、要するに陀羅尼というものは経典以外にも独立してインドでも随分、いろんな厄災から逃れたり、あるいは法を得るためにされたものです。そういう陀羅尼の信仰というものが『法華経』に結びついてくる。

それから『妙荘厳王本地品』。妙荘厳王の前世の話で王の子供がですね。これは第七化城喩品にも出ますが、釈尊の出家前の子供の羅睺羅と似たような設定になりますけれど、その二人の子供がですね出家して、外道の信仰していた父の王様を仏教の信仰に変えさせた、というそんなふうな信仰。

それから最後の『普賢菩薩勧発品』は普賢信仰です。現在でも普賢信仰というのは、普賢菩薩という表現は、最も抽象的な表現で、もう菩薩の代表的抽象的表現だと言われておりますが、これは華厳経にでてくる信仰で、華厳だけには限りませんけれど、『華厳経』に出てくるのも普賢信仰が大きく

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

出てきます。

このように二十三品以下は、曹洞宗の方々には細かく説明しすぎたようかもしれませんけれど、要するにこの五品がなくとも『法華経』の内容、思想内容にはちっとも変りはない。もっと面白い事にはですね、中国で『妙法蓮華経広量天地品第二十九』いう偽経があり、二品につづけたつもりでしょう。

さらに、これも敦煌出土のものですが、『妙法蓮華経馬鳴菩薩品第三十』というのもできてくる。つまり法華経ではいろんな信仰がどんどん、付け加えられたということです。

話の中途で申しわけありませんが、結論を先に申し上げるならば、法華経の精神、あるいは法華経が目指しておるものは、先程道元禅師の「法華転法華」の所にもちらりと出るように、釈迦仏だとか、あるいは文殊仏だとか、十方諸仏だとか、あらゆる諸仏によって説かれた、あらゆる諸仏の共通の、あるいはあらゆる諸仏の証明された内容が根底にあるんだ、という事です。という事は、その根底さえはずさなければ、その根底に基づくならば、あらゆる信仰が『法華経』に理論的には加わってもかまわないということです。法華経の成立史的にも二十二の嘱累品以後が加わっているんです。また中国においても二十九品、あるいは三十品というようなものが加わったという例もございます。こういうところからしまして、既に中国で『嘱累品』が中途にあるのは疑問視されていますが、このような点から推し進めて法華経の原型を探り出してみたいというのが、本日の講演のねらいでもあります。

法華経科・成立一覧表をみて下さい。一番下の欄で第一類、第二類、第三類と一応法華経の成立を研究された先生方の共通した説をまとめてみました。多少の表現や区切や成立年代の違いはありますけれど大体このようにまとめられます。そして、本田義英先生なぞは、第一類・第二類・第三類の下にA・B・C・D・E・F・Gと抜き出したのが後世の附加分で、それ以外のところが法華経の原始分だとされています。そのうち最も古く形成されたのが第一類、第二類のうち、下に抜き出したもの以外のものだと申しておられます。それから嘱累品の以後を、その後に付け加えられたものだとしております。さらに他の先生方は本田先生が原始分と申しました中にも、第一類、第二類の分類をされる方が相当おられます。

その代表的な方が布施浩岳先生の説と思うわけでありますが、プリントにもありますように、中村元先生や田村芳朗先生なども、区分の仕方や成立年代については多少異なっておりますが、大体似たような区切りをしていますので、一応私もそれに順じたわけでございます。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

そうしてみますと、第一類の中に「原始法華経」という名称を一応書いたわけですが、これは偈頌が先か、長行が先か、一般の言葉でいいますと散文体と詩偈とどっちが先かは一概には言えないのですけれど、ま大体において詩偈の方が先に成立したといわれております。結果から言えば、長行を詩にしたのを重頌、内容を重ねて頌にしたことを申しますが、そういうものなぞが多い点からして大体やはり偈頌の方が先だったんであろうといわれております。布施先生はまず西暦前百年頃偈頌が成立し、その後で、西暦前五十年頃、長行、散文体が成立したんだ、と説いております。それからその後にいわゆる第二期として、法師品から嘱累品と序品が出他たとおっしゃっております。大体そういう事で、第一類、第二類という事から第一期、第二期、第三期といったような事が大体現在類推されております。

法華経の構成

それで内容から見ましても、やはり方便品、第二の方便品から第九の授学無学人記品、人記品と省略してある場合もありますが、そこまでが、どうも成立史的にも最も古いであろうと考えられ、そしてこの八品、八章は前後の脈絡からも統一されておるというのが在来の研究の結果であります。たとえて申しますならば、第十の法師品以後書写の功徳が述べられるようになる。天台教学では五種法師と申しまして、経典を受持・読・誦・書写・解説、すなわち経を体に持ち、それから読む、それから誦、暗唱する、それから書写する、解説、人々に解釈して教えるの五種が重要だというのです。書写が法師品以後に初めて出てくるということは、経典は本来暗誦して口から口へと伝えられてきたもので、経典を書写するようになったのは紀元前後と推定されているからです。その他いろんな理由が挙げられますが、法華経成立史の話ではないので略します。そして第一期に第十八の随喜功徳品の偈頌も含めるんだとの説もありますが、これはちょっと例外といたしまして、とにかく最も原始的な古い層がどうも第二方便品から第九人記品までと考えられるわけです。それで序品は、最初にありますが内容からみても八品が出来上った後、すなわち第二類ごろに加えられたものとみられています。

あらゆる我々の論文でもですね。本論を書いてしまってから最後に序をつけるというのが多くの人のやる事です。現在の法華経成立史の研究は、経典の内容の矛盾や出てくる仏・菩薩や釈尊の御弟子名などから、さらにサンスクリットばかりでなく、周辺のギリシアとの交流などからもなされているのです。

たとえば第四の信解品にはお金の貸し借りの記述が出てくるんですね。そんなところから中村先生などは紀元前四十年

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

頃に成立したんじゃないかというような事を申しておりますが、それはそれとして、いろんな面から多少の例外や入れ違いはありますが、大体この第二の方便品から第九の人記品までが最も古い形、言うならば原始法華経と申しても良いかと思います。

ところが、プリントの上に書いてあるのが天台大師の科文でございます。天台大師は二教六段などと後後世呼んでいますが、法華経の前半を「迹門」それから第十六の如来寿量品を中心にした後半を「本門」と二つに分けております。さらに一教三段、全体をですね。第二から第二十一までを正宗分と名づける考え方もありますが、本門、迹門それぞれに、序分、正宗分、流通分と分ける考え方が非常に強いようでございます。

これはまあ、皆さん経典を読まれたり、読まれるどころか本当にいろんな面から研究なさっている先生方も多いわけでございますが、大体、こうやって序分、正宗分、流通分と分けた場合に、やはり思想的に、あるいは理論的に、あるいは経の中心思想として出していく場合には、正宗分が大体その中心であるという事は多くの経典に大体共通する事でございます。そして天台大師はやはりそのようにですね、迹門を第二品から第九品までの間を正宗分としている。そしてその中で、方便品の一等最初の、ほんのわずか、大蔵経の分量にして確か一段位だったと思いますが、「略して三を開いて一を顕わす」（略開三顕一）、三というのは三乗、一というのは一仏乗ということで、これは法華経に常に出てくる重要な、タームになっております。それから、それでまあごく簡単に三乗を開いて一乗を顕わすという事を述べて、それからあと後半に広く詳しく、詳説するわけですね。

この正宗分の中を法説周・譬説周・因縁周に分けております。周は一巡りという事で、上根の人間には法を説いて理解させることで、第二番目は中根の人間のために譬ばなしによって理解させる。すなわち成績の良いのは法説周だけでわかるであろうが、しかし中位の成績の者には喩え話によって、それをわからせてやろう。それから最も程度の良くない人達には、お互いの人間関係を述べてわからせる。因縁というのは大体、現在我々が寺の縁起だとか、色々な因縁があったとか、使っているのと似たような面と考えてよろしいかと存じます。本日の皆さんと私とが色々な因縁で、こうやって講演を頼まれたわけです。本縁部というのが大蔵経にありますが、本縁部の場合は釈迦如来が前世の数々の善行をしたからお悟りになられ仏陀となられたという釈尊前世の物語りです。法華経では必ずしも釈迦如来だけじゃなくて、舎利弗、目連も、あるいは千二百五十人のお弟子たち全部含めた因縁の物語によって説くわけです。お前たちは昔、前世において

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

私の説く法華経の座で法を聞いたんだよ、その因縁が熟してまた聞くようになるんだ、ということでございます。この三つのパターンによって第九品までができておるわけです。ところが先程申したように現在の学者の多くの方々がこの九品までが法華経の原始分としていることと不思議にも一致するわけです。

そこでちょっとプリント（表2）の一番上の方を見ていただきたいんです。現在中国に残っておる法華経の註釈書の最も古いものが、羅什のお弟子の道生の『法華義疏』ですね。ところがそれを見ますと、第一授記・第二授記・第三授記と大体天台大師と似たような、大体同じ区切りをしておるわけです。聖徳太子の『法華義疏』のサンプルとなった光宅寺法雲の『法華義記』も法説・譬説・因縁説としており、各品の配当は同様であります。

もう一度天台大師の科文をみていただきたいのですが、この法説周の中に正説・領解・述成・授記と分科されまして、譬説周も同様、因縁周は領解と述成が省略されていますが同様の形で説かれています。まず正しくお釈迦さんが法を説く。するとお弟子さん達、聞いていた人達が理解して作仏できるのだという喜びを述べる。これを領解と表現します。すると次が述成で、如来はこれから授記するにあたっての意義を述べて、未来成仏の保証を与えるわけです。あるいは私はこう理解いたしましたよとお釈迦さんにお答えする。そしてお釈迦さんが、そこまで理解したんなら、お前は将来成仏すると授記するわけで、最初に授記された舎利弗は未来世において華光如来という仏になり、その仏国土名は離苦国というのだよと具体的に記莂を授けるわけであります。その四つの形態が天台大師の場合にはちゃんと形が出てきておるわけです。

それと同じように道生の場合には、第一説・第一授記（方便品・譬喩品前段）この間の領解・述成という科文はございませんがこれはおそらく第一説中にあるいは第一授記の方に扱っておるんだと思います。そして道生は、この天台で言っている法説周にあたる部分を、第一回目の説と第一回目の授記としています。それから次に天台の科文で言いますと、信解品にあたる正説から授記品に至る授記までを、第二説、第二授記と相応します。それから第七化城喩品から第九の人記品に至るものを第三説、第三授記と、このようにしておるわけです。もちろん道生の書も天台大師は見ておられるはずで、その影響もあったとも考えられます。

それからその次が梁の三大法師の一人といわれる光宅寺法雲。その科文を見ますと、ちょっと表現は違っておりますが、それぞれのところではですね、天台大師と同様な表現で「法説して上品を化す」と。次は譬説。喩えで説いて中根を

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

化す、と。第三には因縁説によって下根を教化す、と。そしてその中もまた内容はちょっと違っていますが、しかし法説・示同領解・述成領解相・授記と、天台大師の科文と表現も全く類同でございます。これは光宅法雲の『法華義記』の影響が非常にあったという点と、天台大師は光宅法雲の説を名は同じだけれど義は異ると批判しておりますが、やはり同様な法華経の構成を理解していたわけであろうと思います。

このようにこの科文についてもですね、天台大師は批判をしながらも道生と光宅と天台はほとんど同じでございます。

さらにこれは天台大師以後ですが、中国における法華経解釈のもう一つの重要注疏として、法相宗の慈恩大師の『法華玄賛』がありますが、これには天台と同じように一教三段、二教六段という二つのたて方を立てまして、詳しくは申し上げる時間がありませんが、現在問題にしておりますもっとも原始法華分にあたる科文については、第二方便品から第九人記品までを正宗分としまして、それから細かい点となるといろいろございますけれど、中国の現存する法華経の解釈の代表的学僧たちが、大体法華経を同じようなおさえ方をしておることがわかります。ということは、やはり法華経の内容、説相、説かれた形というものが、やはり誰が見ても同じような構成にならざるを得ないんだといえようと思います。もちろんこれは梵本と漢訳の違いはありますけれど、現在残存する梵本の研究から見ましても大体このような形になる。そうしますと、法華経の成立史的にも古い部分が、また中国の仏教研究家にとりまして、法華経の中心的思想としての科文を与えておる。

それで、この本門、迹門、時間がありませんので少しはしょりますが、本門、迹門という事について一言申さないといけないんですが、日蓮宗の方では非常に本門というものを重視いたします。迹門はもう抜けがら形骸であるというような事を申しまして、本門を重視しますけれど、これは一応、第十六如来寿量品を中心とするところのもので、今まで法を説いておられた釈迦如来は実は五百億塵点劫、天文学的数字の昔、既に成仏しておって、常に法華経を説いてきた。だから久遠の釈迦と申しまして、歴史的釈尊が仏法の理を人格化した形において永遠の救済主となるわけで、この本門の久遠釈迦の出現によって歴史的釈尊の法華を説く場面は久遠の釈迦が過去に幾たびか法華経を説かれた一部分、仮りの姿となるわけで、本門が本来的のものであるというわけです。天台大師は本迹不二と申しまして、いずれも互いに相補って久遠の釈迦の宗教的生命と、その理論的意義づけは別々に考えられないとするわけです。

しかし我々学んでいく者にとって、あるいは法を聞く者にとってはですね、迹門の理論的体系からいって初めて久遠の

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

釈迦というところへたどりつくわけで、そういう意味におきまして我々学ぶ側からとって見ますと、やはり迹門の思想が一番重要なものではないか、とこう考えるわけです。重要というのは迹門と本門のどっちが勝れているというのではなくて、学ぶ側からとってみれば、本門の理論的、思想的問題を解いていかれるのが一番はいり易いと、こういう意味で重要と申したわけです。ですからこの三周説法と申すのも、法説周、譬説周、因縁周という事に三段に分けて、これでもか、これでもかといって、同じ思想を何回も何回も言っておるのが法華経の特色で、文学作品としても、譬話や宗教的人間関係の中から法華経の精神を理解してもらおうというのであります。

法華経のめざすもの

以上舌足らずの面もありましたが、法華経の構成を、その成立史の研究と併わせて申し上げてまいりまして、中国の主要な法華経注釈者の考え方と、また梵本をふまえての現在の法華経成立史を論じた大体の結論との両方からみまして、第二方便品から第九人記品までが、法華経の原始分と考えられることを申し上げました。

さらに中国仏教学者の代表的法華経研究者四名、道生・光宅・天台・慈恩の注疏の共通する科文から、この原始分も三つの要素から成り立っていることを申したわけですが、天台流に申しますと、法説・譬説・因縁のいわゆる三周説法の三分類です。そして法説周で理解できない弟には、譬説周で説明し、さらにそれでも理解できない機根のものには因縁周によって理解させるという構成からみると、法説周が法華経の中心思想とみてよいわけで、各周の中の科文も正説・領解・述成・授記とそれぞれ共通しているところからみても、お解りかと存じます。

ここで四つの科文の漢字を見ただけでも、正説が法華経の意図する主張・正説・主旨とみてよかろうと思います。これは道生の第一説・第一授記の表現をみてもより明瞭であろうかと思いますが、如何でしょうか。このようにみてくると方便品の正説が、法華経の中心思想というか、法華経の説かれた意図と申して差しつかえなかろうかと思います。事実、道生が第二説・第三説と科文で示しておりますように、天台でいう譬説・因縁周の正説では方便品の主張と大体同様なことが述べられております。

そこで方便品では、どのようなことを申しておるかというと、「すべての人々に仏知見を開き示し悟らせ入らせるため（開示悟人）に出現したもので、これを諸仏は唯だ一大事因縁をもって、この世に出現したのだ」と説きはじめます。これが「一大事因縁」とか「出世の本懐」という有名な言葉で

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

す。

それじゃ、その説かれた法華経の内容はどういうことなのか。経では種々の表現で説かれておりますが、一言でいえば一仏乗ということ、あらゆる一切のものに通じ、あらゆる諸仏も説かれた普遍的な仏法が、法華経で説かれる仏教で、具体的には声聞とか縁覚といわれる二乗も作仏できるんだということを言うわけであります。

先程申したように、大乗仏教では、声聞、縁覚という修行者は成仏できないのだというのが通説であります。声聞というのは今の考えでいくとイデオロギーにかたまった、一つの一元思考家で、自分の修行しているこの法だけが一番すぐれていると、自らの立場に固執しているものといえましょう。仏教の伝統的解釈からいいますと、自らの悟りばっかりに専心して他の救済などに目もくれない小乗の阿羅漢になることだけを目的とした釈尊の御弟子たちといわれています。しかし決して貶されるものでなく、釈尊の説かれた修行を一生懸命にやることで、これは大変立派な修行者ですよね。そして小乗の教えといわれますが、学問的には上座仏教の修行者で、とてもあのような偉大な仏陀になれるなどとは考えもしない。そういうのが声聞です。

それから辟支仏、縁覚あるいは独覚と訳しますけれど、これは今まで私どうしても縁覚、声聞と二つの系統を立てねばならないのか疑問で仕方がなかったわけですが、解釈によりますと、声聞というのはお釈迦さんに法を耳で聞き、もっともお釈迦さんが亡くなった後だとすれば、お釈迦さんの説かれた法をお経などで聞いたり読んだりして、そして悟りを得ると一般的に考えられております。独覚というのは、他から法を聞くことなく一人で修行して悟るんだといわれています。何かその両者がどういう関係になるのか割り切れんかったわけですが、最近の研究で阿含経典のなかに独覚のみを主題とした『呑仙経』という経典があるんだそうですね。仙呑という山があって五百の仙人を呑んだという伝説があります。部派仏教の内にも部行と麟角喩の独覚をあげておるそうです。法華経の譬喩品には辟支払のことを「自然慧を求め独善寂をねがい深く諸法の因縁を知る」と述べています。私の推定では、仏教徒でない独修、独行の思想家あるいは修行者たちではなかったろうかと思います。

伝説によりますと、摩訶迦葉だとか、釈迦の十大弟子といわれる中には、五百人の教団を率いて教団ごと仏教に入信したという伝説もありますようにですね、一人で自分でこつこつと仏教の教えなんか聞かないで、覚者となったような、そういう人達が現実にあって、そういう人達が仏教徒の中へはいってきたり、あるいは仏教徒の周辺にいたんじゃないかと、そんなふうに解釈したら声聞・独覚、釈迦のお弟子さん

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

と独住の修行者という二種類の修行者ということですっきりするわけです。要するにですね、いずれも自分の得たものをこれで完成したもの、それが最もすぐれたものと固執する、言うならば自己の学問に、あるいは自己の境地に、あるいは自己の悟りに安住してしまっておるもの、そういうものが二乗だと考えてよいわけです。

そういうところから大乗仏教では、声聞・縁覚は成仏できないんだと峻別し、単に排斥するばかりじゃなくて、軽蔑さえしてきたわけですね。ところが法華経の一番大きな特色は、そういう声聞、縁覚すらも法華経の教えを聞くことにおいて、成仏ができるんだ、というのが一番の特色なんです。これは中国仏教の初期において、羅什と廬山慧遠の交換文書が十八通残っておりまして、今『大乗大義章』と名づけて編集されておりますが、その中で羅什は慧遠に法華経は深々秘密の経典だから、声聞・縁覚も成仏すると説いておるんだと声聞・縁覚の作仏を特別のことに把えています。このことは有名な『大智度論』でも、法華経を二十数回引いておりますが、その主な引用を声聞作仏に関すること、法華経の特色は声聞授記である。仏弟子の成仏できないものが将来必ず成仏するんだ、とそれが「法華経」の特色なんだと、いうわけです。

そしてこの方便品で説かれてたのは「唯有一仏乗無二亦無三」と有名な言葉で表現されているように、声聞の教え、辟支仏の教えと種々あるが、二乗作仏という論拠から、ただ一仏乗だけあって、それを説くのが法華経であるというのであります。方便品では最初に、諸仏の説として二乗、三乗は方便で一仏乗だけが真実であると説くのです。さらに過去仏においても、この一仏乗ということを説いた。今まで説いた経典、仏教は皆これを説くための方便なんだ、あるいは方便のために説いたんだと述べるわけです。そして最後に皆の機が熟したからこの一仏乗、このあらゆるものに共通した、あらゆるものを含めた仏教を説いた。しかも方便品の説相によりますと、ただ一仏乗だけで、二乗も三乗もないんだ。諸法実相という事も仏と仏とのみ知っている法だ、という事も説きますけれど、それは一仏事に摂せられるわけです。それから過去の諸仏もこれを説いたんだ、現在十方の諸仏も同じことを説いたんだと、同じことと言わないで一仏乗の表現をそれぞれに述べるわけです。それから現在も釈迦である自分も、この法を説いているんだと五回繰り返しているわけです。五種類の仏を挙げていますので、天台の教学では五仏章と言っております。そしてこの法華経のぎりぎりの、唯一仏乗だよという説いたそれは、あらゆる諸仏も説かれ、そしてそれを説いているんだ、ということを繰り返すわけで、あらゆる諸仏の説ということで、これは法の普遍性を意味すると思いま

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

す。しかも先ほど申した法説周、譬説周、因縁周によって、それを喩えをもって、あるいは因縁をもって同じ主旨を種々の様式で、いろいろな表現で繰りかえすのが、原始法華経の説相であり構成であるわけです。

そしてその説かれた内容は、このようにして守らなければいけない。このようにして修行しなけりゃいかん、というのが第十品以後にいろいろ述べられるわけで経典の特色である流通分となるわけです。またこのあらゆる諸仏が同じように歩んだ道ということは、一仏乗はあらゆる仏が説いたものであるという法の普遍性を示しているわけであるわけです。方便品でただ一仏乗だけが仏法なんだと説いた後で、「舎利弗よ、もし我が弟子自ら阿羅漢、辟支仏なりと思わん者、諸仏如来のただ菩薩を教化し給う事を知らずんば、これ仏弟子にあらず、阿羅漢にあらず、辟支仏にあらず」とこう申しておるんですね。これはすでに阿羅漢を得たと確信し、究竟の涅槃であると思って、本当の果を志求しないものは増上慢であるという主張でありますが、裏をかえして申しますと、如来の真実義を理解したもの、あらゆる仏教は一仏教であることを体得したものは、真の阿羅漢であり辟支仏であり、仏弟であるという意味となりまして、その意味で声聞や縁覚の修行を認めるということになろうかと思います。私は法華経の一番原始分における正説である方便品に説かれる主張は、法の平等性、普遍性、それからこれは後で第十六如来寿量品のところにいくと、仏の普遍性、永遠性という面をも含めまして、今まで説かれた法、行なってきたあらゆる仏道修行、仏道の学問は、全部それらを否定して、新たに別のところに法華経の精神があるのではなくして、在来の行なった、そのままが百八十度の転換によって、そのまま仏道修行なり、仏法が生きてくる、とこういうことを申し上げたいわけで、これが本日の講演の結論でもあるわけです。

これは私は読み方が未熟で、あるいは道元禅師を冒瀆することを恐れるんですが、どうも道元さんの「法華転法華」を読んでいて、それを非常に強く感じたわけです。今後これについてますます勉強させていただきたいと思いますけれど、要するに法華経には、法華最第一だとか、最も勝れた経だとかいっぱい書いてありますけれど、また法華経を護持するためには、あるいは誹謗する者はどうするんだとか、種々の面から菩薩行が述べられておりますが、その一番中心になっておるところのものは、仏法の普遍性だと思うのであります。ある意味でいえば、三階教の普法というものにも共通する法であると感じられるのです。そうしてだからこそ、あらゆる仏教というものの存在意義を認めていく。この方が種々の菩薩行を説くより法華経の重要な思想だったろうと思います。

ところが現在は、付け加えられた品ものばかり、とは言い

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ませんけれどね、法師品以下のですね、菩薩の法華経を護持していくにはどうしたら良いか、法華経を布教するにはどういう修行をしたら良いか、というような個々のいろんな信仰の一部分を取り出してそれを一生懸命、これ宗教的行為として非常に重要なことですけれど、どうもそっちだけに一元的に走ってしまうのが、法華経だと、どうも在来捉えられ過ぎてはいないだろうか。これについては、もう少し説明しなければなりませんけれど、長くなりますので結論だけ申しますが、あらゆるものの存在を存在意義があるとして認めていく根本精神があって、これを種々の形でこのように何回にもわたっていろんな諸信仰が付加されてくる。ですから私は、理論的には、建前としては、日本においても法華経第五十品、第六十品できても、ちっとも中心の思想から言えばおかしくないんではないか、このように考えたわけでございます。

どうも時間の配分が悪くて充分に皆さまの納得がいったかどうか、あるいはまた、道元禅師の読み方も足りなかったかと思いますけれど、私は法華経ばかりじゃなくて、般若経典にもあらゆる大乗経典には、あらゆる法のユニバーサルというか、法の普遍性そういったものがあると思うんです。そういうものを今後見出していくということが、仏教というものが平和共存の大きい精神的依り拠として、人類に大きな役割を果たすんではないかと。そこまで私はとても自分ではできるとは思っていませんけれど、しかしそういう大きい希望は仏教を学ぶことによってより如実に出てきはしないかと、そのように考えておるのでございます。果たしてこれが法華経の本当の精神の受け取り方であったかどうか、自分でも自信を持って言えない点も無きにしもあらずですが、私が数十年来法華経の勉強をしてきました大体の結論が、今まで述べてきたように相成ったということを述べさせていただきまして、本日のお話を終わらせていただきます。なお、これにつきましては大変後になって申し上げて失礼なんですが、昨年大正大学出版部で出された『仏教と人間生活』の中で「法華経のめざすもの」という題でお話したことの一部分でございますので、思想的なり、教理的にもう少し詳しく知りたい方はそれをお読み願えれば幸いと思います。

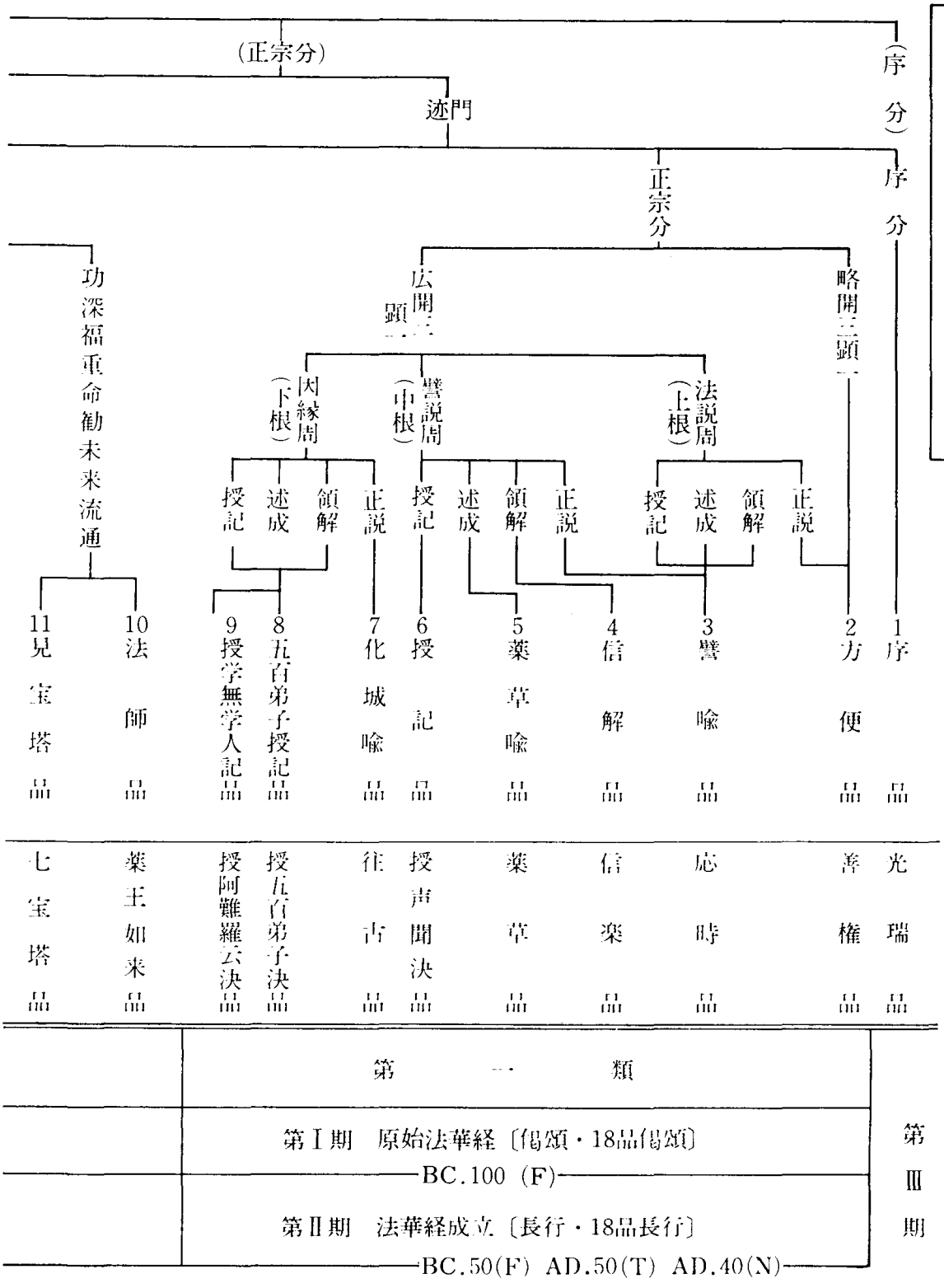
どうも大変、御静聴ありがとうございました。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

法華経科・成立一覧

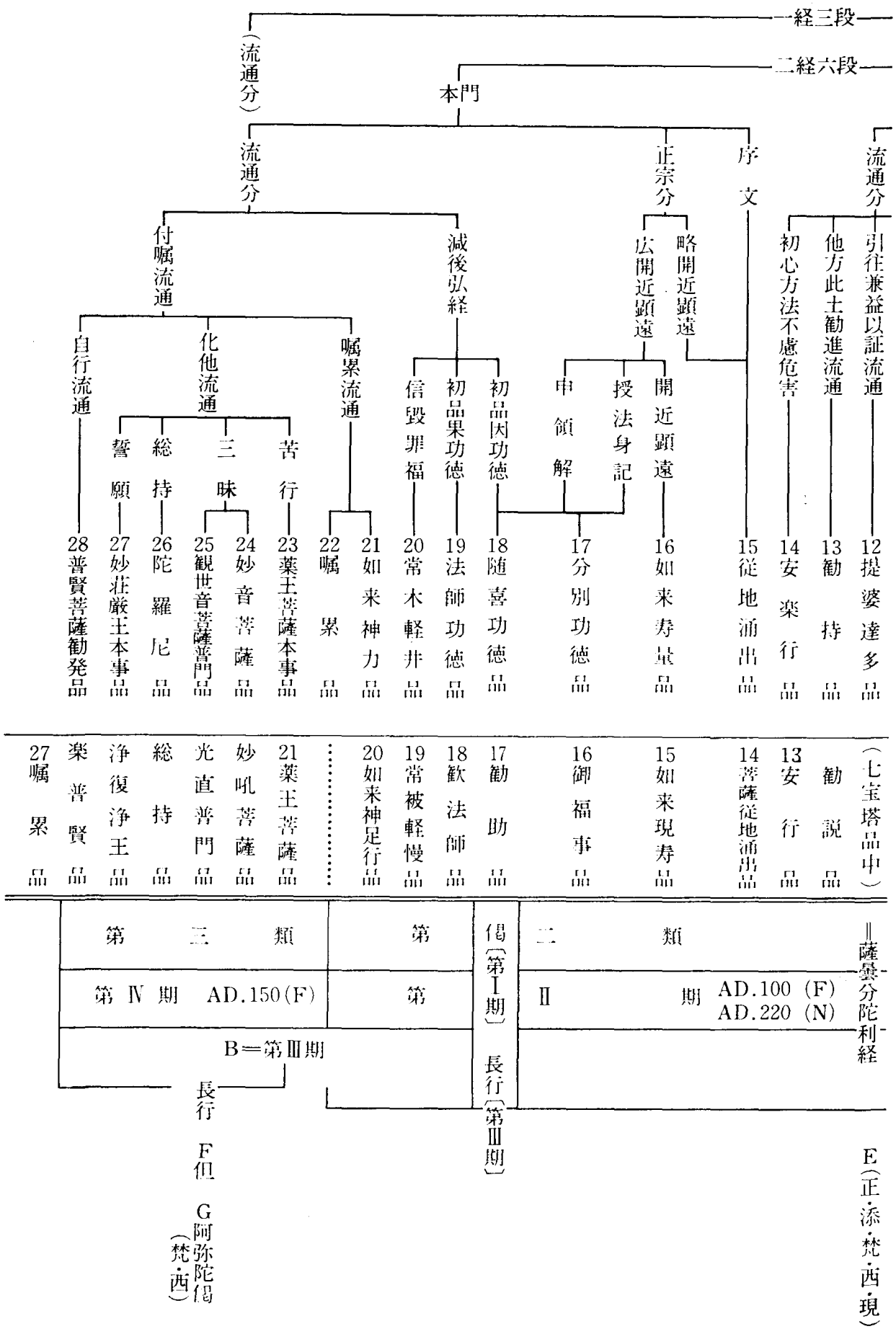
（表1）



（現行妙法華）（正法華）（成立史）

NII-Electronic Library Service

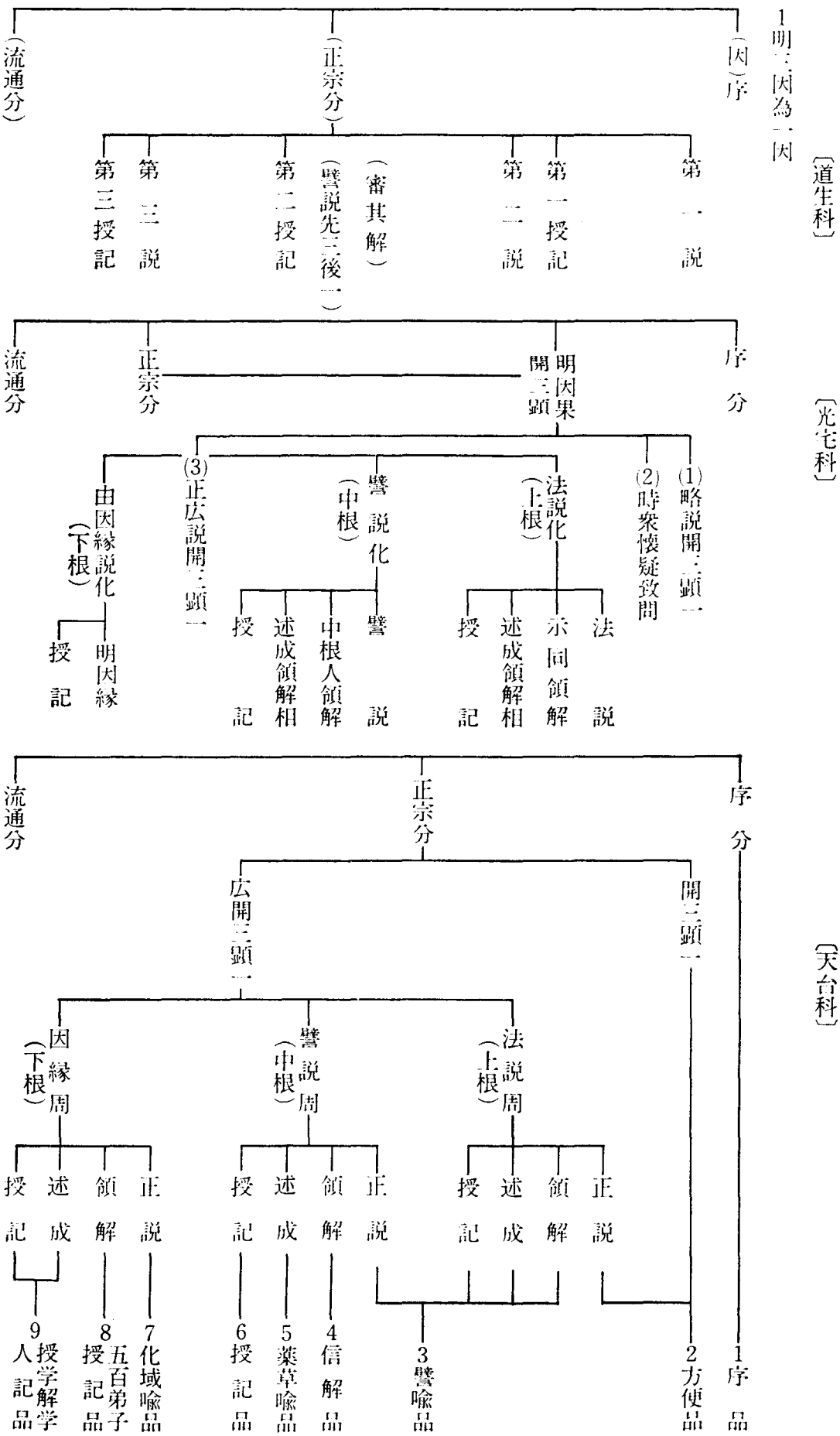
Komazawa University



NII-Electronic Library Service

Komazawa University

原始法華経の諸師科分（表2）



NII-Electronic Library Service